



武江年表

一

伊地知文庫
文庫20
383
1



武江年表

江戸書鋪

青藜閣



武江年表序



伊地知氏書冊

龍泉大阿之塵。お豊城也。蒨
 蔚紫之柔騰。誇斗牛之間。其
 威靈如此。而終出於石函。且
 雌雄似雜。鳴呼。何頭悔也。
 聊。之。恠哉。隆然。其。至。復。お
 匹於延平之津。則。其。或。可。為。知

正字全 身
矣。其害一可益見矣。由是觀之。嚮
似可怪者。即是泉阿之威
靈。所以傳于萬古而不磨滅。而
顯悔之取。關係為案。大矣。豈翅
象。以凡物之有匹。自有其
數存焉。何桑受之失。得哉。
友人齋藤月峯。寄職之語。

著書者。千一種。既行于世。今
茲又著武江年表八卷。分
為雌雄。先取其雄。四卷。持
之。其為書也。自慶元鞞鞞
迄于今日。大之。天災地妖。坊
街之沿革。世態之遷流。物
之權輿。事之興廢。小之。少

人之生率神佛之啓合龍及
風謠俗談珍玩戲具。經羅
不遺。攬撮尤勦。凡二百年來
之事。讀一洗一。來隨求隨
在。族者受其易終。而更無
繼。定忘。繼哉。事勞。缺掌。操
觚不苟。退待。未日耳。其至

如象阿復匹。至麟。括沙彩
光射波。具生美。可全。見矣。
其功可念。知矣。然別此編
之。雄鳴。以待。來日。者。亦。取。以
地。雌雄。相匹。傳。于。前。古。而
不。朽。也。與。其。何。憂。之。有。須
日。剗。剗。旋。工。發。兌。卜。吉。仍。舊

貫乞為。朱亦不敢。辭便題
蓋辭以為延。平前。等云。
嘉永二年。屠維。心。墨。月
上。游。

荆山陣人源瑜



七十老戰驅。親。錄。依。扇。藍
輿。教。太。平。宮。朝。貶。孫。謀。臣。列
國。日。光。高。照。海。東。城
試。神。劍。罷。并。收。權。二。百。年
間。不。動。兵。官。家。今。日。真。無

事發震高歌唱太平

四月十七日作二首

右二絶句若文化乙亥夏

日光宗廟弗忘之辰鵬齋氣回翁
之作手親筆取以贈先考也々取
以弁於卷首云

月峯誌

提要

○慶元より曰降昇平の化光世を被り教下の甚敷日小陪せり此故小
遊洒僻境の人とひとしき里を遠くせせり厥佳廉を着願度去と
作くともて郷土の父祖の名所國會ありて後視の禁と一決小余ら
感事記を繕して示守引とて再此輯をあら村澤野塚のありし
在武秘華の梗葉を知くむるの一助と云

○此編并載所所の中人以上の身月小解るとと久小く地理の沿革
或は坊間の風俗事物乃格要小至るまで獲る小隨う遠く素と
公迎乃濟事の切ひ知る小た小あつたため傳算せる事も傳算るれ
たの并編せり

○是元以來新地を撰むは流産列居の舊郷地を阻く可く小播
寺社民屋も地を編むる新小創り或は舊故の舊小置りて處を
畧小するの類もたておふへり以故并見算小たてて一二を

河入國の後不日尔河津地志同の鹽を江戸運送えんさうの爲彼地より船の通達を
塘しぬる小尾今の字橋の通ありと有り
天文より元龜のころは河津より小田まで
陸の年貢を納り河津地には碑も残る

○八月平河天満宮 津城内梅林坂より 津城の北平河に移さる

○夏津勢の与市より若狭親橋の辺津城の北平河に移さる
此の年貢を納り河津地には碑も残る

風長濱永紫一旗あり皆人喰く〜
長見安
集小出

○四嶋山廣津寺今下谷
小あり 小田系小寺が今年小系家滅亡の後江戸へ
此時の位指を希世和尚より小田
津田へ移りまゝ河津地の中今の
地へ

来り今の昌年橋の辺地を軍庫店を営む
此の時位指を希世和尚より小田
津田へ移りまゝ河津地の中今の
地へ

○天正の頃軍兵小乱波風間とりの強盗あり黨を結び陣中し
忍び入て盜を多し徳人あまりらるる今年より何れへ逃退ひのきし

絶えんり小系五代記

天正十九年辛卯 正月間

正月冥八洲の徳家さへし采首の津安と〜
始々登 城あり〜と云

○十一月軍東津社小津寄附願の津朱中をなす
○赤坂一木町屋敷

○十二月軍八洲通用のさめ小判小刺を造しぬる
以時代浪一板九合
きく女小ありと有り

○小田系まじまじの靈風山種連まじまじが今年後赤坂一木へ移る

文禄元年壬辰 十二月八日改元

津城の西北の地大法書組屋宅地をなす六組小分あり一書と云

六書まゝの名目あり
是より書町
と有り

○田系山抄頼と天正十八年小田系より河津へ移す
○河津より河津へ移す

本館町の地小寺院をぬる
天文元年又河津町へ移すは明徳の災後津系
移すは河津の寺院より河津へ移すは河津の寺院より河津へ移す

彼地の高岩も次子小田系へうらまひ有る者津領城町の軍費入在司志志ちる小系家小田
一其の子あり父果て後小田系落去あり以時代浪一板九合

河津より河津のり小田系より河津へ移すは河津の寺院より河津へ移す

友誼を以て廊をひらけり尚元和の件小あせり又小田原の豪家増田も右友誼
友誼明人小又靈香といふ服某の方を授り一がわ家あせりて後江戸小あせり
本町に丁目小あせりて彼某と佳言ふ小あせり
ありてはるる今ハ他人のあせり製せり

文祿二年癸巳 九月閏

天正十八年の後島川一寺地をぬきり一日照山法師異山英峯今午

道三河屋今の地一移移天和三年津川 ○惺窩先生旅歛始て江戸旅窩の室下り中一編と

我有と云 台命を傳りて貞觀政要を讀む一困暇四景我有解のうを

飛りて在軍の遊遊と云 是とと士家武時陽田流波を云と又いんは文某小
見えたり米りれハ畧以惺窩和弁集小あせりて

たうあせりてやとあせりてゆむ秋の月の東海の北と

○天正の頃常陸國江戸時也といふ小あせり法皇一羽と云兵法の名人

あり王子泥介畧間小徳根後菴角と云て名を傳りて父子二人あり

徳是子病の時菴角の病人を見換て逐電ちん江戸ちんまで微塵流と

名付一派を起して父子あせり随一と見ぬ徳の勢ひをあけ一羽と

二年と云病死して友人の父子菴角が本を以て孫傳りて

人の内江戸へ下りて菴角を討べと一議一罷をとりて小徳小あせり

うの小徳ハ江戸へ頼り泥介ハ固止り麻島の社小菴角相伝を祈り

小徳江戸へ下りて文祿二年九月十八日日本橋より菴角小あせり

より官府より此事を以て刀根を預り木刀の仕合をぬき一あせり

一うか友人木刀を持て去るる菴角打負てては切たり逐電して

行方を知らばいぞ以上小徳又代記のうを畧以實尾菴角編のち家小あせりて

同三年甲午

九月千坂大橋を始て掛く此地の鎮也同本徳時指現別當因徳院の記録小

橋板ありあせりて橋板倒して船を斃一船中の人あせり小徳又徳時指現小

移りて後橋
まことり

○今年米穀豊饒あり

○小田系不老山壽松院今年当地に移させしれ今の龍治橋の同小
と流をぬちる後年神田柳系の辺へ移り又後系へ移る

文祿元年乙未

武蔵小判蔵

光次と奉書以武蔵と
波河も亦少造せり

○小田系當知山奉誓す江戸へ移り

あひ日は谷橋所町の辺へ地をぬちる後年喰町の辺へ移り天和二年

の後今の地へ移る ○芝長見波集之舟町と日市のあひふちひ

さた橋只一ツあり是は波渡の橋あり文祿二年夏のあろび橋のり

あろびの残籠を捨ちて水糸跡うち交りてありしや

官府へさへあつり交りては橋を残籠橋といふとありあろびの船町

兼日市町は今の残りぬ橋のあつり小舟一物あるべし

慶長元年丙申

七月間 土月二十七日改元

一步并小判金始て通用 芝長見 ○六月十二日系所歳月算本決本大

難又水糸障 芝長見
に五寸 ○閏七月朝鮮人來艘 ○閏十二月大地震月と途

止む ○波河墨を寄る ○多田宗玄といふ人靈告を寄りて系所

東山の辺より某所像を携りて奉庄ふ安は今の多田の某所あり

○穠町常仙も宗基安某所を安と

同二年丁酉

神田不老山感應寺宗創 元山日感上人ありは地不詳然七年
ちを建つ今岩中寺は神田感應寺といふ

同三年戊戌

松平為後と波別より江戸波河墨の下へ移る 後實元永宣元年小
系今の波系へ移る

○八月三縁山増上寺日は若より今の地へうつる まことりハ今のヤヨス
の寺日比

世時正造營有まうらひ

事孫金考云世本堂の世頼模の由を以て造る所を世時正造と云ふ

○大城所普濟寺付柙町のる場所用地あり大の辺の遊女屋とも云ゆ

預ち前へつらつら○世時代造く小道橋多あり武家藩邸後移多

○南窓よりタバコ蕃株を渡り長崎より播る場ありめてタバコを栽

一説天心中書入
持海ももりの

寛文十一年 丙午

大城を築起ある二月より始り九月尔成終あり

志の所如原祀後より清正祀後より大なるを裁きり世頼よりひらきり

自ら吳橋のか立して善政を免災ぬらまじり

○選置(清書并物とも賜る積出の使もたす

寛文六年

のほろより商賈のたすむに城兵田彈(清書)と下

以上系産難後小あり系産云田原といふ國名不詳り一は番丹のあまのうと云く

○六十六別行実を結て枯る○幸に昌清と三河橋筋後河意より後

あり○十二月八日永樂錢法停止通より用小(手)有日本橋(手)れを

寛文十二年

乙未

小桑女麻の時冥本中永樂錢を用へて令せられびと残上方より天下は一統となり二錢充定て用ふあるも永樂一錢のりありびとに足錢を爲てきよ是れゆへて皆要をえりひ万民安うけたりて今年永樂を止むひ一ゆへに永樂代記ありり或記云永樂一貫又金をよむと定め合ふりり此の面錢一錢は除きては錢は合ひ永樂一貫の價を除て九十六錢をりて通用せり

同十二年 丁未

己卯

二月十二日より十六日まで

清城のちをて觀世金春勅進能具行あり

同廿日同前よりか雲の神子お國勅進奇舞妓具行あり

見伝又村を刻てお雲は小村を

り人の娘と云くおふり

○烟系法州(弘)より上下を統

煙系法州を刻て

悉く火を吹そけりて吸ひて後ひきせを利ひて紙小紙せひきせるの製法を

利ひて外の外を用ふ又木をきりてのを下敷ありて造りせる器もんたり

○通清園白伝平公清下向ありは時梅老をよ本母と改めひ歌をか

よむせむをわいてこけりてありては事と云ふ

東より見ゆる舟むはしの色乃江戸くく水とひくくの南田川あり

○閏二月朝鮮信使初来聘正使長祐吉副使慶選筆丁好寛 ○八月八日客星現行

慶長十二年戊申

林道春先生濟儒若小命世々々世時と先生後世に在り

同十二年 己酉

三月に日月の容方ありて現る皇幸代答小方形月出満没如番

○二月島津度琉球を征して仲山王尚寧とを將ひ来々々

○八月阿茶院始々入貢奉書 唐船始々来

○湘草所創林一洗元和元年ともいふ ○秋品川海舟初為山際より海始々々々

乃際乃透幅を度け々々河還自中をささ々々々

同十八年 庚戌 二月 閏

芝愛宕権現神社拜殿閣門石階木造建立田福もこの時建立と元和二年の丙辰紀行小堀のりらの詞ありと有りや

造りひろげて今の大層とありぬと云後持院の旧名あり

○七月十九日勅々上寺十二世貞蓮社源卷上人ふ台もせんちこ一普光親智法師の

屋をあらふ ○八月琉球始々後府并江戸 河城へ入貢王尚寧奉書

○官醫吉田宗狗卒其子宗達又良医のゆえあり大橋宗柱も宗狗の男あり好茶園式一卷を著し

同十六年 辛亥

正月二日竜口蒲生疾疫落火中門外仙人羅漢の彫物ありて災原

あり々々世時焼くると云 ○琉球聘使来 ○京中亦耶蘇宗再葬

○龍徳山雲光院阿茶局建立了喰町の焼あり ○六月廿二日加藤肥後と清正卒

○官醫善養安流正理卒四十七才五箇と号山城守の人あり曲直原及この門人ふ

あり後傳を嫡子正田小濠て別在小瀬所在

江戸町は川多しありしと皆荒川なる事 河城の堀をめぐり日本橋へ
流るる川は一筋幸川なりと云ふ小川なり山本は神田郡神の氏子西浦
と山王権現の氏子なり

江戸より西へとて細き流し一筋ありけり神田山原の柳屋よりあり
たり 中畧 地あり 河城堀のめぐりを流して日本橋へ流るは流し小橋あり

後せりさき中もは留たき橋ありと云ふもあた橋ともありはれも言ふ
はらち入心後かき水の帝より日本橋へ物使する數百人の唐人は江戸
よりしるしありしをりくありありと云ふは雛子なるはらち好ありと云
たり雛子を集めありは流のありと云ふを屋を焼り雛子を隠りあり
は並ぬと云ふ雛子のありと云ふ橋一と云ふありを雛子橋と云ふは江戸
の町を雛子町と云ふ お

井の水は塩き入り万民を苦しげしを憐みあり神田郡神田山原の
あり水木の町は流し山王山本の流をを南の町は流しは二あり江戸
町はありありと云ふあり

虎の御門より愛宕の辺田地ありと云ふ野上梅の木より幸もあり梅田と
いひ田の沖のありれをさし川といひ今の源助橋は時のありと云
張りしと云ふと云ふ

江戸町築島は勅進能毎月毎日ある事あり 水事又代記あるは此大なる事あり
小一尺のち更及者ありと云ふ
一能ある事あり町ありありと云ふは流系にありは流系をくたき毎月
毎日初を能あるは流系にありは流系をくたき毎月

江戸町は小倉屋人とのありの居風屋といふありのありと云ふあり
貝人園集小倉屋と云ふは流系親世より湯島天神神田明神貝塚山王権現
梅田山王と云ふ増と云ふ吉祥と云ふ廣徳と云ふ弥勒と云ふ東光院常と云ふ幸教と云ふ

ありあらねどもあまきり限らふあはれ
○本江の富士ふじのふもとあり 約は
らうしてしんげん注産をなす六月一日大市立く勢田なるらうり

以上考し長見入文集ふ不載
抄るし旧記あり

○この頃傾城屋定りし廊ろくあはくあふ敷せんざい在江菊町八丁目ふ十六七
朝系六重より来る鎌倉河原ふ十口朝緩河弥初町より来る大橋の
内柵町ふ廿四朝慶長十年ふ元徳頼も前引紙は大橋は今の常盤
橋あり柵町は今の道三河原のふなりしと云せんく醒世氣の奇海若おも前
後を考す後ふふ足普通の流ありと事合考今の系橋具足町の
系草沼の汐入を築きく傾城町と云は地九九く一一方はふふ
南の河側をすく町水の河側を柵町と名つ事申一篇のありと申の町と
名つくと云くこの流ふとれは芝芝の頃江傾城町へ系橋の柵町あり今

柵柵町ふみ町ありと云く
たのむりのあはれと柵風ふふれてと云く
あひこ云くこの流ありと云く

この時世風呂屋湯女ありわら
見は集ふ天正の頃の流湯のふを云て後ふ
云その頃の風呂屋さんまんの人もありとありて

あはれあつこの流の事や急う流りておもいされは湯ありともありぬあはれと云て小風呂
の口ふふふさうぬさき風呂を好みしう今も町々毎ふ風呂ありびこす流は流り
あて入るなり湯女といひてあまめける女は廿八人ありひ流りありと云く
くお又ふふふさうあはれと云くひあはれと云くひあはれと云くひあはれと云く
といひて持来り熱を流せと云くをあひとあり後徳集あはれ風呂屋は戸ふ
あり朝より日く暖は七冊ふは舞臺のうち風呂入人の垢を流しは湯女も七つ切ふ
仕也又より八月の支交を相へ書所ありしつ風呂のより垢を周る格子のあはれ
あはれ今この原風呂とを引江一火を燈しは湯女は在後をあはれと云くせんと云く
小舟舟の物をさうといひあはれをせしあり
右の風呂は本枝町にも二軒ありと云く

○書籍を板小刻む事と始洋ありしは江流中持字大業經の事本江ふ

目んえり元久二年法然上人造る所の選擇集を板小刻む事
ありされと戦ふの亥火小羅りぬく亡ひ天正の頃迄の板刻の書は事
ありと云く

元和四年戊午 二月間

二月 濟之河邊立あり 今の津島郡の ○日本橋津再興

○河城の辺より火大探田焼交 ○十月宮の刻長雲が 禁里が

○月白の勅堂津再建十一面觀世音を安んずる東寺山形を築くと

あらし 中興山秀

同又 辛巳未

夏より冬より入りて毎夜白氣を東南の角の如く長數十丈又

禁里を築くありて火止りの如く

○又月より八月まで大旱又穀也く人死る多し死に

○大坂津を善治 ○長谷川を築くとその為久保八幡を境内より

時の鐘を創設改室中甚切也く福 ○九月十二日櫻雲先生卒

九十九才門入林道春先けりふも其たり名波た田舎に云
麦不を得菴松永昌三宅并 齊よりんこの世に少の

同六年庚申 十二月間

後長山普門院隅田川の辺より龜戸村に移る ○二月十日後友代

光亨卒 九十二才 ○十一月二日僧と中興觀智園作入寂 七十七歳

○淡路津を築始く建 ○日本橋を築せしむ 其陰の爲小築せしむ

古より多くを築く所ありたるを或は
日教六十餘日ありてを築く所ありて

同七年辛酉

二月觀世を一代徳貞行を揚新東洋

○九月廿二日小堀遠州侯と宗政後長と為友を築するの儀とて津家

川の舟より酒舟を築ふと送るも一と云ふ

為り来んとちたのむわたり人かこむと云ふ世の如く

○十二月十二日織田有樂兵衛七十才恒居の町をえ敷奇屋町と云今あり有樂恒居あり一故云

元和八年壬戌

活所遺稿 壬戌元日遇雪

雪隨世事正紛々 閑座牕間東武春 諸葛青蓮開隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村に冨島直下向わりの紀行を定海道記とあり

十一月十六日

江戸より舟をかりて一泊して舟をかりて一泊して

富士のねとみやうとて同いひとてあつた

同九年癸亥 八月間

心月明の復遠澤郡統邑餘動溪をよる小親をよるのこころを言へ

歌を掲ぐる ○正月八日智恵白道情隨意上人寂七十にやとて入世のゆゑをの事あり人そのみ

○芝場とて山門浄再建

○十一月十六日幕所奉因坊日海寂六十にやとて入世のゆゑをの事あり一書し六月あり

世年間記事

女舟の船を捕せしれ男舟の船を捕せしる女舟の船を捕せしる男舟の船を捕せしる

○奉祈一月とて葛西まて船通一々一二三に又の船を掛

海路せしるゆゑに寛永の始の事ありとて

寛永元年甲子 二月晦日改元

停勢停難宮とて長官おに市双太神を江戸日本橋通とて

おとす同十年おとすの地代地 延暦寺とて

○長江流中靈を感し永代高子八幡宮を勧修を同八年再

貞あり ○日吉村石物堂は再建 ○淨西把孫重復

○東叡山實氷より淨建立園山慈願大師あり 幸海金考は此の地は舊堂を廢

の地を考附あり一西あり一
の地を考附あり一西あり一
の地を考附あり一西あり一
の地を考附あり一西あり一

○道平山靈巖を築削 は所へ今云又巖高の地之権譽又巖上人地分

○明石志久助寄お撰く号一に言権町より晴天六日具行 は言権を

○二月十八日より津橋より於て中村勳之助より寄お撰く号 は言権を

○二月十八日より津橋より於て中村勳之助より寄お撰く号 は言権を

○十月十五日小柄系然持権現社改の藤子終りの二字現は言あり は言権を

○十二月朝野人素勝 は言権を

寛永二年乙丑 は言権を

湯島小幡禪院創立 は言権を

○南八丁堀一丁目あるより稲荷社を舊社あり は言権を

○八月指折二堀大工のり は言権を

同乙丑年 丙寅 四月四日 は言権を

○二月より八月は徳兵衛 は言権を

○二月より八月は徳兵衛 は言権を

けころ民名のねり小

江戸味増を二まのりすりてつむののみそをそりりぬる月

○今年より武家くこ辻番を直る場ふお終て辻斬あり一板を

寛永七年 庚午

正月八日隅田川あて

古塚の志う一松柳ゆあつらひささくもむ着るる處 指映た伝

○二月十日日醫所甲斐連奉率

百十七やうりひのまきのみあて後り一や件
巨武家の男をひきあつらひぬるうひの

徳本一後十六歳と吸あつらふ
と名著述の医を柳花をひきぬる

○二月小湊遊生寺あり

一布引祖師

像身以上奉承さうらひ ○二月二日身丈久遠より日蓮池上奉承

日樹宗論日樹伝及飯田小配流 ○六月琉球人奉承

○同廿二日大地震毛降 ○八月山王社法造營

○魚鱈親世者二田の地小安直以 山法天上人を奉承のま
らう勢きりあつらひ

○十二月廿二日大地震成刻光物飛行 一と奉承さうらひ

同八年 辛未 十月國

三月十九日江戸沖不天降 ○同廿日若屋耳露降

○四月二日淡草を直上 ○去年より今年まで六十尺波瀾を病

む若多 ○東叡山小大佛像 造立あり

築基廣泥を結するの如し
ことを造るゝめらる後奉承

新願測りて碑を後 清水親善中堂建 ○八月大風お庭を壊ち樹木

を折る ○十月天降 ○十月十二日後夜氏代連奉承 八十

○十月十七日上野大名焼落立 依る大橋亮孫之と
彫りり一丈八尺余

同九年 壬申

諸家源秘録云今年より奥良仙臺の茶穀始より江戸に上る今
下江戸に上る二六矣及茶の産ありと云令一と云て七に江戸産あり

○平塚明社社海邊立秋不至く減乾

○凶年より山王法皇被禱り大旱の禮と候

○宝林山養旨必す親町代地とて宮谷へ法

○七月琉球人來聘 西使依敷子合衆あり 村山又二席世居葦原町

○八月八日或る災の活祭の室 市村羽左馬 虫

齒を赤くぬぐひ終ふ今日終由り源終ふ送 市村羽左馬 虫

○明人安計 後池の 江戸日平指安計町をぬき又お州二浦遠見村を

願ふ其妻好満尼今年七月十六日終遠見村淨土より墳墓あり

安計の忌日墓碑を築く 不 安計

寛永十二年乙亥

正月廿五日寅卯刻大地震年未刻又地震あり 後府内を震始

○春鳥丸大納光座 つひら 今東山下向あり此月の記を春の曙 おんちの

又源通村 いもむら 山下向あり

○安宅丸の御船 わんせいの 御船 一説小寛永十一年とも云 柳川町の辺小島を

○二月天台院 てんたいいん 浄土 浄土 今源河 しんがわ

○六月十二日大風遠及豆丹海海の船八艘被損 わだかまの

○七月天赤く あか 如燒 やう 〇 あか 帰 かへり 如赤 あか 如赤 あか 如赤 あか

○八月日持 ひもち 山樂 やまがく 山樂 やまがく 山樂 やまがく 山樂 やまがく

○八月日持 ひもち 山樂 やまがく 山樂 やまがく 山樂 やまがく 山樂 やまがく

○八月日持 ひもち 山樂 やまがく 山樂 やまがく 山樂 やまがく 山樂 やまがく

○八月日持 ひもち 山樂 やまがく 山樂 やまがく 山樂 やまがく 山樂 やまがく

洋ありは年梓子ゆり
とて世に稀あり

○十二月朝鮮人來聘

正使白藤任統副使東濱合世深
從事青丘英床 張跋本抄古今

武江年表卷之一 畢

